



# どうしたら伝わる**生物多様性**

生物多様性理解促進のための  
パンフレットを作成する皆様へ



# はじめに

地球環境関西フォーラムは、1990年6月、地球環境問題は人間活動の根源にかかわる課題であり、科学技術、政治、経済、社会意識、更には生活様式の変革を含む幅広い問題として、産官学民が力を合わせてこれに取り組むべきとの認識から設立されました。これは、リオ・デ・ジャネイロで開催された環境と開発に関する国連会議における「気候変動枠組条約」の採択（1992年）に先立つものであり、関西という地域を基盤に、産官学民が一体となって環境問題に取り組むプラットフォームとして先駆的な存在でありました。

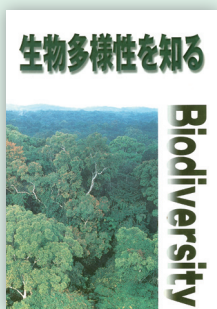
生物多様性についても、1993年に「森林と生物多様性」をキーワードとして「アジア、太平洋地域における地球環境問題に対する関西の環境協力のあり方」についての調査研究に取り組んで以来、「国際生物多様性科学研究計画西太平洋アジア国際ネットワーク(DIWPA)」などと連携しながら生物多様性に関する調査研究を進め、いくつかの提言を発表するとともに、生物多様性の認知度向上とそれを市民・自治体・企業等の行動に結びつける活動を行ってきました。その中で様々な普及啓発パンフレットを作成し、生物多様性の広報・教育・普及啓発(CEPA)に継続的に取り組んでまいりました。

このように、設立以来20有余年に亘り、さまざまな環境課題に向き合い、解決の処方箋を発信してきた地球環境関西フォーラムも、2018年5月を以て、解散することになりました。解散に際し、活動の集大成の一つとして、生物多様性の主流化の一助になればとの思いから、「どうしたら伝わるのか」との視点で、既にさまざまな主体により発行された多種多様なパンフレットの中から参考にした事例などを取りまとめ、本冊子を作成いたしました。これから、生物多様性の理解促進を目的としたパンフレットなどを作成される皆さまにお役に立てれば幸いです。

最後に、この冊子を作成するに当たり、パンフレットを送付いただいた方々のご協力に感謝申し上げます、お礼とさせていただきます。

地球環境関西フォーラム 生物多様性部会  
座長 山西 良平

◎地球環境関西フォーラムが制作した主なパンフレット



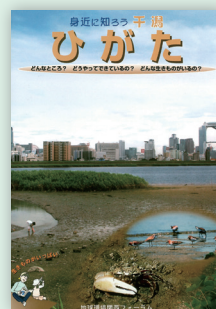
2000年



2001年



2005年



2008年



2013年



2012年

2013年

地球環境関西フォーラムが2000年に作成した『生物多様性を知る』という普及啓発パンフレットは理解促進ツールの先駆けです。その後、個別テーマを扱ったパンフレット『水辺の自然をまもる』、『身近に知ろう干潟』、さらに環境マンガシリーズなどを刊行し、今も活用されています。

『関西自然を楽しむ風景100選』は、自然と歴史・文化・暮らしなどが共生した風景を、行政と企業のメンバーが共同で選んで編集したエコツアーのガイドブックです。



優良パンフレット選定会議



## 目次

はじめに	2
<b>I 全体的講評</b>	
全体講評	4
評価者別講評	6
優良パンフレットの紹介	9
<b>II 優良パンフレット作り手インタビュー「作り手の思い」</b>	
「田んぼの学校フィールドノート」の企画編集者に聞く	10
「身近な生き物とわたしたちの暮らし」の制作編集者に聞く	14
<b>III 分野別講評</b>	
政策広報ツールとして	18
教育ツールとして	20
研究機関からの発信	22
市民団体からの発信	24
企業広報ツールとして	26
ビジターパンフレットとして	28
観光促進ツールとして	29
<b>IV これからパンフレットを作る皆様へ</b>	30
終わりに	31

## 全体講評

パンフレットの評価は地球環境関西フォーラムの生物多様性部会ワーキンググループ（以下WG）の3名の委員と事務局で行いました。

今後の「生物多様性についての理解を促進させるパンフレット」作成に役だてるために、どのようなパンフレットが生物多様性に関わる活動を紹介するものとして出されているのか、そしてどのような工夫がなされているか把握し、評価項目を設定し評価することとしました。

WGで9回の会議を実施し、パンフレットの評価対象、収集方針、収集方法、収集先、評価方法、評価軸を決定し、その後、3回の会議で評価作業を行いました。

収集にあたっては関西の自治体、企業、NPO、博物館などにお持ちのパンフレットの提供を呼びかけ、その結果、200冊以上のパンフレットを収集することができました。

### ●多様性のパンフレットの集まる場所はどこ？

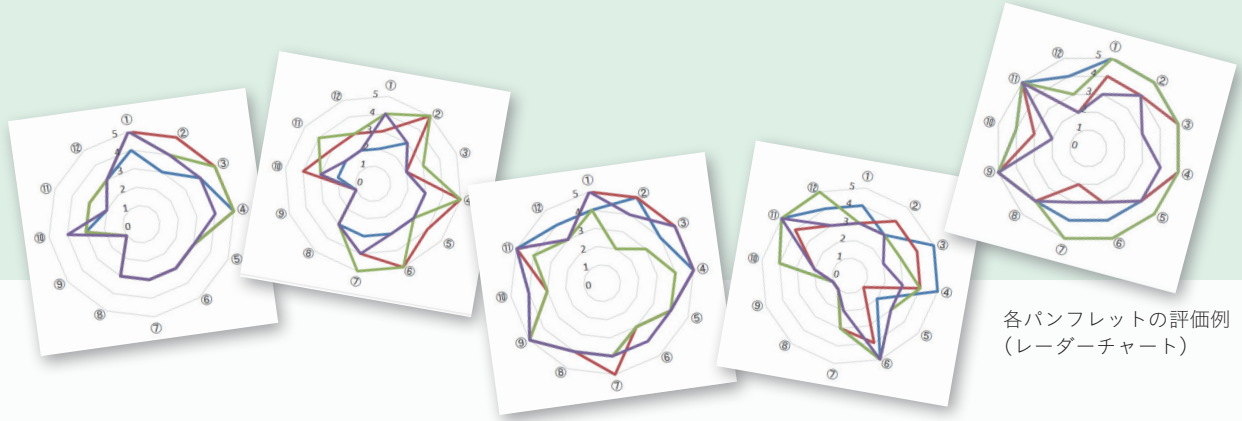
「生物多様性についての理解を促進させるパンフレット」と言っても様々なものがあります。作成の目的だけで言っても行政の政策を説明するもの、教育のための補助教材、生物多様性体験を促進するような観光案内など多種多様です。パンフレットがアピールする対象も子どもからビジネスマンまで多様です。収集の際には、これらをふまえ、できるだけ広く集めることを目的としました。収集は近畿の各府県の生物多様性関連の行政窓口、自然史系博物館などの生物多様性関連施設、きんき環境館などの環境系啓発施設、NPO、また地球環境関西フォーラムの会員企業などにご協力をいただきました。その結果は200冊以上となったわけですが、幾つか気になることがありました。一つは、収集先の間での重複が少ないこと。環境省のパンフレットなどは複数の拠点から収集されたのですが、ほとんどのパンフレットは単一の博物館や行政機関からしか収集できませんでした。これは私達の収集努力が十分ではなかったことと同時に、生物多様性関連活動があまり広域広報ができていないことを示しています。もう一つ

は、行政機関が地域の生物多様性活動の情報をほとんど集約できていないことです。森林行政や公園、教育といった縦割りの組織の中で、同じ府県の情報でも担当部局以外には集約されていないようでした。民間の活動ではなおさらです。多くの府県では生物多様性関連活動の情報が集まる拠点が十分に形成されていないことを示しているのかもしれませんが。今回の収集の中では、比較的自然史系博物館から多くの資料を収集できました。

また、今回は市民団体が発行しているパンフレットに比べ、行政機関が発行しているパンフレットが多くなりました。また自然史系の博物館が作成したパンフレットも多数集まりました。これは今回の収集方法による影響かもしれません。今後、機会があればもっと市民活動で作成したパンフレットを評価していくことは生物多様性関連活動の促進に大きく貢献することができるでしょう。

### ●パンフレットの特性を知り、目的に応じて効果を考える

集まったパンフレットを評価するに当たり、生物多様性のパンフレット自体の作成目的が非常に多様であることを踏まえ、一つの評価軸だけでは優劣は決められないこと、それでもその目的と対象、利用シーンなどを想定してどのような工夫がされているのかなどを評価することは可能であろうと考えました。このためWGでは、まずすべてのパンフレットを対象に「12の評価項目」（p.5上図参照）を用いて各委員が5段階で評価し、この結果をレーダーチャートに示しました。これは、すべての項目で高得点をとったものが良いパンフレットというよりは、そのパンフレットの特性を示しつつ、その効果を見出すためのものです。バランスの取れた丸に近いものもあれば、一点だけに秀でたパンフレットもあるでしょう。どちらが良いというのでなく、その性格を見る事ができます。



各パンフレットの評価例  
(レーダーチャート)

### 【評価項目】

- 構成上の工夫……………①ターゲットの明確性  
②デザイン性  
③教育ツールとしての使いやすさ
- 理解しやすさ……………④具体性  
⑤生活密着度  
⑥地域密着度
- アクティビティの高さ…⑦フォローアップ度  
⑧コンタクトの容易さ  
⑨Web上への掲載
- 学術性……………⑩内容の新しさ  
⑪生物多様性との関連性  
⑫資料性(学術性)

12の評価項目は4つの観点に3項目ずつ割り振りました。構成上の工夫についてが①～③、メッセージをわかりやすく伝える工夫についてが④～⑥、興味を他人とシェアできるような工夫が⑦～⑨、生物多様性との関連性の記述や資料としての価値が⑩～⑫としました。

例えば地域密着度や生活関連度はパンフレットの目的や対象によっては重要ですが、それを必要としないものもあるでしょう。資料性もすべてのパンフレットに求められるものではありません。これらの評価はあくまでもパンフレットの特性を明らかにして、その目的や対象、利用シーンなどと合致しているかを判断するためのものです。

本来であれば一つ一つ、製作者の皆様への聞き取りなど周辺調査を含めて評価すべきものですが、試みとしてWGによる一方的な評価といたしました。

### ●評価結果について

個人ごとの評価の作業の後、委員全員から高評価を得たものを上げてみました。全体の総合力だけではないという当初の思い通り、幾つかの対象分野やカテゴリーにわけて、目的と工夫がうまく合致していると評価したものについて、18ページから示しています。

ページから示しています。

そうした中で、パンフレットに込められたメッセージやどのように使ってもらいたいのかというコンセプト、デザインワーク、その後の活用の可能性など、全体として高いバランスを達成しているものとして2つを選びました。生物多様性を配慮した地域づくりが盛んでなおかつ情報発信にも力を入れている豊岡市から、コウノトリ市民研究所の『**田んぼの学校フィールドノート**』と、そしてもう一つ伊丹市昆虫館などとの連携活動で子ども向け発信に評価の高い伊丹市から『**身近な生き物とわたしたちの暮らし**』伊丹市立小学校生物多様性副読本の2つです。

この2つには、潤沢な資金や行政の取り組みだけでない、良いパンフレットにしようという「思い」を特に感じました。その思いの正体は何なのか、それをうまく実現した工夫や制作過程はどういったものだったのか、この2つをいろいろな意味で今後の参考にすることができる「優良パンフレット」として位置づけ、製作者へのインタビューを行いました。

WGメンバーは研究や博物館活動をバックグラウンドとしたメンバーとなっています。ビジネス、広告業界のメンバーや消費者活動関係者など、もっと異なる視点があれば選出結果は変わっていたかもしれません。WGとしては多様な観点を意識した評価を行いました。結果としては積み重ねた自然観察の成果を上手に発揮したものが選ばれていることは、WGメンバーの嗜好が反映されたのかもしれません。個別の結果よりも、選考・評価の過程をより良いパンフレットをつくるための参考としていただければ幸いです。今回の評価は無料の配布物として作られたいわゆる「パンフレット、リーフレット、配布冊子」をパンフレットとしてまとめて対象にしましたが、地域によっては無料配布物よりもweb広報に力を入れているところ、有償頒布物に力を入れているところもあるでしょう。生物多様性の情報発信はそれらも総合的に見るべきなのかもしれません。このパンフレット評価を一つの参考にしていただき、より生物多様性の情報発信全体が発展して行くことを希望しています。



## 評価者別講評



生物多様性部会 座長

**山西良平**

Ryohei Yamanishi

西宮市貝類館 顧問

元大阪市立自然史博物館 館長

京都大学理学研究科博士課程単位取得退学

専門：海洋生物学

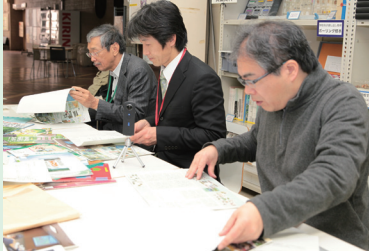
このたびの取り組みでは各方面からお送りいただいた200冊を超えるパンフレット、冊子類を吟味させていただき、生物多様性理解促進の方策を考える良い機会を頂戴しました。

1995年以降、生物多様性国家戦略は改定を繰り返す中で精緻化しています。地域戦略についても環境省による手引きの効果があってか、県や指定都市レベルでは大半が策定を済ませているという流れにあります。心強い限りですが、地域戦略の広報ツールを概観すると、総論の部分を中心に紋切型の傾向もみられなくはありません。はたして生態系サービスの4機能の説明がそのまま市民の腹に落ちるのでしょうか？ ナミテントウやアサリの斑紋変異の写真で種内の多様性の意義が伝わるのでしょうか？ またエコロジカル・フットプリントなど消費生活との関わりや、低炭素・循環型社会との統合的課題解決について触れられている例は少ないようです。地域やそこで暮らす人々の生活によりいっそう密着した戦略が求められます。

また、策定された地域戦略が、それぞれの自治体の他の施策と密接に連携しつつ、市民参加のもとに活用され、年ごとに深められているものになっているかどうかという点も重要です。たとえば豊岡市の場合、生物多様性地域戦略は、『豊岡市環境基本計画』の中にしっかりと位置づけられています（p.18参照）。この基本計画の冊子の出来栄もすばらしいものです。さらに、計画の進捗状況は年ごとの報告書として市民向けに公開されています。そこには市民や事業者、そして行政（市）による取り組みの事例がそれぞれ詳しく紹介され、さらにそれらに対する定量的指標に基づく評価結果と環境審議会の意見も付して掲載されていて、計画を恒常的に推進する大きな力となっています。このような先進的な事例が広まっていくことを期待します。

生物多様性の普及・啓発は自然探求や生命観の構築、人間形成にもつながる奥深い活動です。漠然としていて目標や成果が見えにくいとも言われますが、それだけに多様なアプローチが可能だと思います。作り手の個性が活かされた、ユニークなツールがこれからも多数生み出されることを願ってやみません。





生物多様性部会 委員

## 佐久間大輔

Daisuke Sakuma

大阪市立自然史博物館 学芸課長代理  
京都大学理学研究科博士課程単位取得退学  
専門：菌類生態学、里山の民俗生態学

パンフレットを200冊じっくり見る、という機会はそう度々あるものではありません。見比べるうちにいろいろなことが見えてきます。一つは、これだけネット情報が溢れた時代でも、広報媒体としてのチラシやリーフレットが影響力を持っていること。大阪市立自然史博物館の来館者アンケートなどで見ても展示会やイベントの広報にチラシは引き続き重要な影響力を持っています。それは画面の中で消えてしまうネット上の情報と異なり、手元に残るものであること。映画やコンサートのフライヤーはコレクターがいるほど「残したくなる」存在感を持っています。生物多様性分野でそんなチラシがあるといいなぁと思っています。

もう一つは、チラシはそのチラシが活躍するにふさわしい場所、文脈があるということです。開催日が過ぎてしまったイベントのチラシがその意義をおおきく失ってしまうように、その場所（たとえばチラシを作った施設の中や駅前）、その地域の中などその印刷物が使われ、見られるのにふさわしい場所があるということです。このことは、チラシの評価を難しくもしました。このチラシはどのようなシチュエーションで使われるのだろう、と想像力が要求されます。

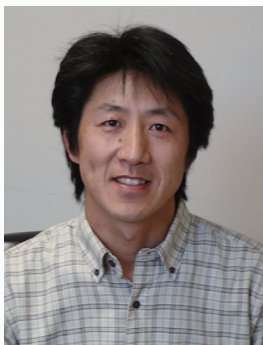
使われる場やタイミング、チラシを使う担い手の力を必要とするのか、そこからはなれてもチラシがチラシ単独でそのポテンシャルを発揮できるのか、チラシのコンセプトやデザインの骨格に関わる点でしょう。逆に言えばこのことを突き詰めて考えていないチラシはどっちつかずになっている様に見えました。

どんな場で使われたとしても、チラシは作りての手を離れて世の中に広がります。チラシを手にした人が、チラシ以上の何かをつかむための糸口として、連絡先や関連のweb情報なども重要です。チラシからアクションへとつなげるための仕掛けは、全体にまだまだ不十分なように感じました。手にした瞬間だけでなく、後にも影響を与えるチラシのあり方は意識していく必要があるでしょう。





## 評価者別講評



生物多様性部会 委員

**宮川五十雄**

Isoo Miyagawa

NPO 法人 森の都研究所 代表理事

企業の環境企画、自治体の生物多様性企画などに参加

京都大学大学院 人間・環境学研究科修士課程修了

専門：里山保全、普及啓発

パンフレットは、おもしろくなければ最後まで読んでもらえません。では、誰にとっておもしろいモノを作るのか。この想定は意外に難しく、今回私たちが手にした200冊の中でも、製作者が思い悩んだまま世に送り出したものが多いのではないかと感じました。

自治体や企業などは、しばしば一般市民向けや一般消費者向けとしてパンフレットを製作しますが、よく考えてみると、このくくり方は、あまりにも多種多様な人たちを含んでいます。その全員がおもしろい内容とすることはほぼ不可能で、無理をするとピントがぼやけます。

この難しさをうまく乗り越える工夫が、今回、大きく二通りあるようでした。

一つは、テーマをとことん絞り込む方法です。例えば、世界自然保護基金（WWF）の『寿司ガイド』（p.21参照）は、海の生物多様性保全の問題を寿司ネタに絞ってうまく語っていますので、予備知識がない読者でもおもしろく最後まで読めます。個々の図表のメッセージも明確で、そのまま呑み屋の話題にもなりそうです。

一方、パンフレットが使われる「場面」を、しっかり想定して作りこむ方法も、成功しているように感じました。例えば、コウノトリ市民研究所の『田んぼの学校フィールドノート』（p.10参照）では、ローカルに豊岡市内で開催される自然観察会「田んぼの学校」という場で、実際に出会える生きものたちを厳選して解説しています。インストラクターが現地で伝えたいツボを、このパンフレットがうまく補うように工夫されているのでしょう。具体的な授業であったり、親子遊びの場面であったりをしっかり想定して、現場に立つ先生やお母さんが使いやすいように工夫する、という作り方は、他にも幾つかのパンフレットで見られた優れたアプローチでした。

また、本書では全体の構成や表現手法が際だっていたものの特集しましたが、実際には、様々なパンフレットの中に、製作者の小さな工夫がたくさん見つかりました。本書をきっかけに、そうした先行パンフレットの工夫や悩みどころを比較してみることも、これからの製作のヒントになることと思います。





## 優良パンフレットの紹介

高評価のパンフレットの中からメッセージやコンセプト、デザイン、その後の活用など全体としての評価が高く、作り手の参考となる「優良パンフレット」2点について紹介します。

製作者へのインタビューを行い、制作する上での工夫などを伺いました。



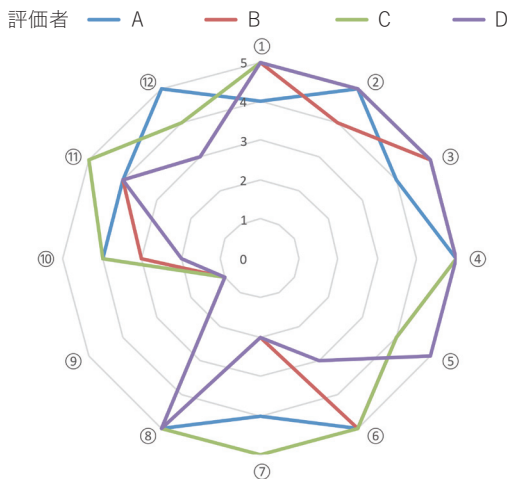
### 『田んぼの学校フィールドノート』

2010年3月発行

企画・編集 NPO法人 コウノトリ市民研究所

#### 〈評価ポイント〉

- ・地域の自然、四季に密着した内容
- ・講師のナビゲーションを想定した構成
- ・直感的に理解しやすい視覚的な工夫



### 『身近な生き物とわたしたちの暮らし』

伊丹市立小学校生物多様性副読本

2015年3月発行

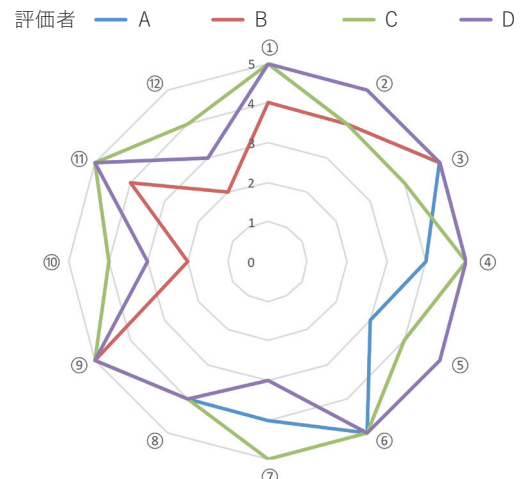
制作・編集 伊丹市生物多様性副読本作成委員会

協力 伊丹市教育委員会事務局 学校指導課

発行 伊丹市市民自治部環境政策室みどり自然課

#### 〈評価ポイント〉

- ・具体的な授業を想定した各ページの工夫
- ・地域で見られる生きものの選定バランス
- ・冊子全体でのストーリー構成



①ターゲットの明確性 ②デザイン性 ③教育ツールとしての使いやすさ ④具体性 ⑤生活密着度 ⑥地域密着度 ⑦フォローアップ度  
⑧コンタクトの容易さ ⑨Web上への掲載 ⑩内容の新しさ ⑪生物多様性との関連性 ⑫資料性(学術性)

## 「田んぼの学校フィールドノート」の企画編集者に聞く

## Step1

## パンフを作るきっかけは？

- 子どもたちと楽しく自然観察をするために  
——楽しさが子どもから大人へ伝わるように



冊子の企画編集を担当した上田尚志さん（NPO法人 コウノトリ市民研究所 代表理事）

NPO法人 コウノトリ市民研究所は野生復帰をめざすコウノトリというシンボルを掲げ、市民レベルでできる自然観察を無理なく楽しくやることを目的としています。「田んぼの学校」は第3日曜日午前中に月ごとにテーマを決めて実施する子ども向けの自然観察会です。参加者は多い時は250人、雨だと20人程度、平均すると50人程度です。参加者の年齢制限はありません。

「田んぼの学校フィールドノート」は、「田んぼの学校」で使う教材を中心にまとめたパンフレットです。この冊子を通じて「田んぼの学校」に来てくれた子どもたちの自然の中での楽しい思いや驚きが大人にも伝わればという思いから作りしました。ターゲットは子どもとその親たちです。

## Step2

## どのように作ったのか？

——作る時の思い、工夫、苦労

- 作りたい人が作る、80%の力で

作成は一人で、作りたい人が作るというやり方で行いました。複数人で作成すると、コンセプトがバラバラになってしまいます。みんなの意見は聞く、写真の提供はお願いするという形で作成しました。

分担執筆もありますが、方針は決めます。100%にすると自己満足となりますので80%の力で作る事が大切だと思います。ちょっと前に止めることが大事。そして今まで積み重ねてきたデータや写真で作るようにします。

- 作成期間は3か月程度

写真のストックがあったことと、作りたい構想は元々あったので対応できました。イラストは自分で描きました。紙面構成は自分でして、印刷屋さんが少し手直した程度です。豊岡市の予算で作られており、増刷しています。豊岡市内の全小学生に配布しています。

季節感が伝わる  
フィールド写真



3月のページ

種を特定するための  
手がかりがわかるイラスト



#### ■冊子データ

『田んぼの学校フィールドノート』

2010年3月発行

企画・編集：NPO法人 コウノトリ市民研究所

体裁：A5判28ページ

#### ■インタビューデータ

日 時：2016年11月15日

参加者：◎制作者

上田尚志（NPO法人 コウノトリ市民研究所 代表理事）

#### ◎インタビューア

地球環境関西フォーラム 生物多様性部会 ワーキンググループ

座長：山西良平 委員：佐久間大輔、宮川五十雄

#### ◎その他 ※所属はインタビュー当時

鈴木康久（京都府 環境部自然環境保全課）

今治安弥（奈良県 くらし創造部景観・環境局 景観・自然環境課）

星野美佳（兵庫県 農政環境部環境創造局自然環境課）

木曾寛造（関西電力株式会社 環境室技術グループ）

吉村孝史（NPO法人 大阪環境カウンセラー協会）

道盛正樹（認定NPO法人 大阪府自然史センター）

田中 猛（大阪府 環境農林水産部みどり推進室みどり企画課）

#### ◎事務局

地球環境関西フォーラム 事務局 仲上、高橋

株式会社 地域環境計画 上崎、石山



## NPO法人 コウノトリ市民研究所について

### ●目指すところ

私たちは「もう少し自然と調和して暮らす」ことを目指しています。自然の恵みもあり、自然の脅威がある中で、人と自然が折り合って暮らすことを実現していきたいと思っています。

実現に向けて、生物調査、地域の生物の専門知識をもとにした地域づくり、地域の課題の中で様々な主体と連携し、目指すべき目標へと前進させていきたいと思っています。豊岡市、国土交通省、円山川水系自然再生推進委員会など行政との連携を重視しています。

### ●活動内容

#### ・コウノトリ野生復帰プロジェクト

コウノトリを象徴に人と自然が共存できる暮らしを目指す

#### ・豊岡盆地の生きもの調査

#### ・ビオトープの調査、管理

#### ・環境教育

田んぼの学校、出張田んぼの学校（地域に向いて自然観察）、

コウノトリ野鳥観察会、各種自然講座

#### ・情報の発信

#### ・豊岡市立コウノトリ文化館の指定管理（2年前から実施）

職員10名、1日5人体制



### ●その他作成した冊子

#### 『豊岡盆地の生きもの地図 2011』（2011年3月発行）

・タンポポ、ゲンゴロウ、アカトンボなど身近な生きものの分布状況を示したもの

・大人向けで一般教養レベルでわかる冊子

・豊岡盆地にどんな生きものがいるか調べようということからスタートした

#### 『豊岡盆地と円山川下流域のRD [レッドデータ] 生物』

（2012年3月発行）

・豊岡盆地での貴重種、注目種を示している

・分類順ではなく、使う立場に立って環境順に配列した

## Step3 作ってみての思い、 次に向けての展開

### ●豊岡盆地の鳥、植物などの冊子を作りたい

豊岡盆地で暮らす鳥、豊岡盆地の植物などの冊子を作成していきたい。メンバーからは地域版雑草図鑑など分野別の図鑑が作りたいとの声が上がっています。

### ●「出張田んぼの学校」に力を入れていきたい

現在、「田んぼの学校」は月に1回、「出張田んぼの学校」（豊岡市主催）は年に20回程度実施していますが、今後「出張田んぼの学校」に力を入れていきたいと思っています。

自然を守り、育てるのは地域が主体です。地域の方が地域の自然で遊べるように、大人が興味を持つように、地域ごとに展開していきたいと思っています。

豊岡市ではコウノトリの存在は大きく、川で遊んだ良い体験が地域にあることが地域や農家の力、元気のもととなっています。この力をより大きく、自然との関わりを深め、地域をより元気にするためには地域で市民と一緒に調査したり、活動することが大事です。すでに公民館単位でそのような動きを始めています。

### ●小学校の先生に手伝ってもらいたい

虫の名前を詳しく知らなくても子どもたちと一緒に虫捕りができれば手伝ってもらうなど、「田んぼの学校」に関わってくれる人を増やすことが大事です。様々な研修会などに行き、ネットワークを広げることも大切です。

「田んぼの学校」は小中学生が対象なので、生きもののことが少しわかっている小学校の先生に手伝ってもらうのがいいと思います。今は学校の先生がこのパンフレットを使うことはありませんが、将来的に使ってもらえればと思います。

### ●高校生も巻き込みたい

「田んぼの学校」は小中学生くらいまでを対象にしているので、高校生にも生きものに関わる経験をしてほしいので生物部の顧問の先生にも働きかけています。高校生とは但馬県民局と一緒にラムサール湿地の生きもの調査を実施しています。

### ●多くの人とともに

生きものを守っていくために行政と一緒に活動するスタイルができてきました。例えば、豊岡市コウノトリ共生課は「出張田んぼの学校」でこのパンフレットを使っています。

多くの人、団体をどう巻き込んでいこうかが活動をすすめていく上で大切です。地域の中に財産となる方は必ずいます。

No. 19  
Date

# 10月

田んぼに無数のアカトンボが飛び交う風景は今は見られない。これから、湿地や無農薬の水田が増えると、トンボにどんな変化が見られるのが楽しみ。

### ●アカトンボの見分け方●

このほかに、透明型にヒメアカネ・マイコアカネ、斑紋型にコノシメトンボ・リスアカネなどがある。

先端は黒くない  
先端は黒い  
全体にうすい黄色  
つけ根が濃い  
翅に帯

アキアカネ  
ナツアカネ  
マユタテアカネ (透明型)

ノシメトンボ  
マユタテアカネ (斑紋型)

キトンボ

ネキトンボ

ミヤマアカネ

アキアカネ

ナツアカネ

とがる  
黒い↑

とがらない  
黒くない

参加したくなる楽しい写真

手描きのイラストがかわいい

No. 13  
Date

# 7月

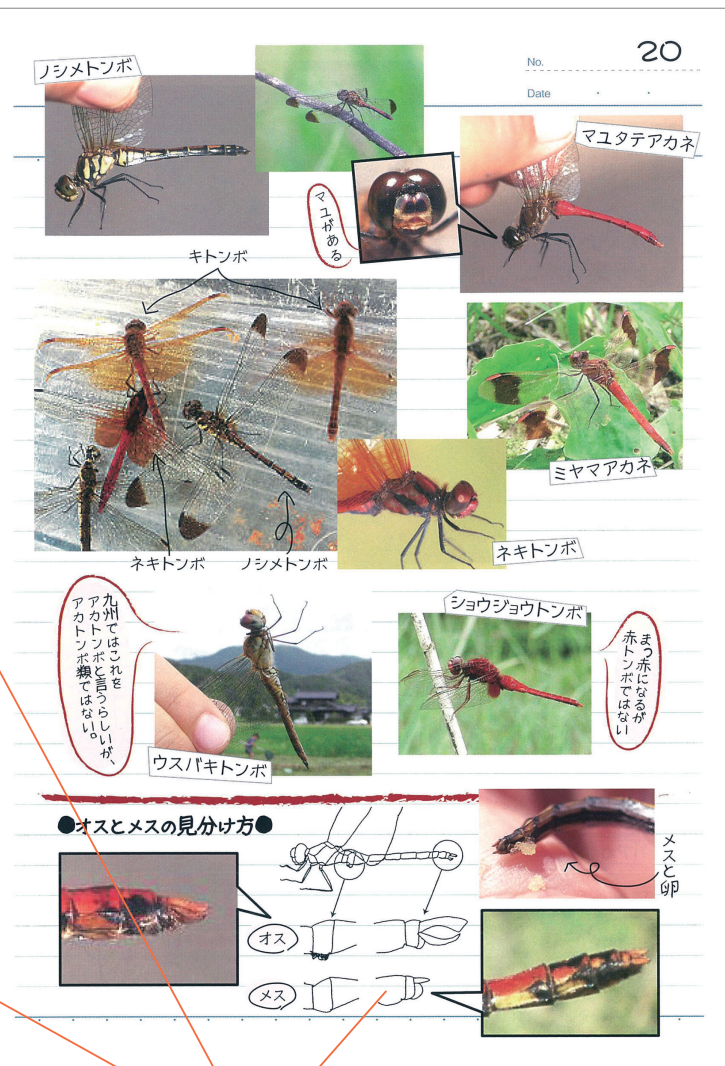
小川に入るとそれだけで気持ちがいい。いろいろな魚がいるが子ども達には簡単には捕れない。工夫が必要だ。

### ●細長い魚

タモロコ  
カワムツ  
オイカワ  
ムギツク  
モツゴ  
カワヒガイ

### ●いろいろな形の魚

中広い魚  
ヤリタナゴ  
タイリクバラタナゴ  
フナ  
コイ  
ドンコ  
ヨシノボリ鯿  
ナマス



○参加者からの声

・行政は事業の目的を優先したパンフレットを作りがちだが、現場での使い方を把握して、使う側の観点も大事にして作成すべきだということが理解できた。

・多くの野外施設では「田んぼの学校フィールドノート」のようなパンフレットがない。このようなパンフレットがあると、子どもが家に持ち帰って話題となり、親にも自然の楽しさが伝わるので、ぜひ作ってみたいと思った。

・写真だけではなく、手書きの絵があると何を伝えたいかがわかる。作り手の思いが伝わってくる。

・それぞれの活動フィールドで生息する生きものを、地図上に載せていくようなものが必要だと思った。

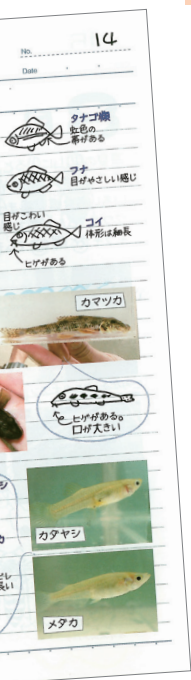


「田んぼの学校」の様子がわかる写真

手描きのイラストがわかりやすく親しみやすい

10月のページ

どんぐりの特徴がわかりやすい写真



11月のページ



# 「身近な生き物とわたしたちの暮らし」の制作編集者に聞く

## Step1 パンフを作るきっかけは？

### ●子どもを対象に生物多様性の普及啓発を進める冊子を作りたい

2012年～13年に「生物多様性いたみ戦略」（以下戦略とする）の策定を行いました。策定に関わる伊丹市環境審議会が2年間に12回審議会が開かれ、5つの基本方針が掲げられました。その中で、伊丹市は都市域に位置し、ほぼ全域が市街化区域で人口密度も高いため、市民に生物多様性に関する正しい知識を伝える・普及することが最も重要とされました。特に普及啓発には学校組織が絶対に入るべきで、学校現場の先生に正しい知識を持ってもらい、子どもたちに伝えてもらう

ことが重要で、効果的だという意見が出されました。

これを受けて、2014年から戦略の主要施策「生物多様性に関する正しい知識の普及」事業の一つとして、「小学生向けの普及啓発冊子の作成」を進めることになりました。

そこで小学校の理科の授業での活用を考え、学校現場で使うことのできる冊子を想定しました。



『生物多様性いたみ戦略  
概要版』  
(伊丹市／2014年)

## Step 2 どのように作ったのか？

——作る時の思い、工夫、苦労

### ●委員会を設置し、およそ1年かけて作成

作成は伊丹市小学校理科担当者会幹事会の先生を中心に「伊丹市生物多様性副読本作成委員会」を設置し、学校指導課など関係者10人ほどで色々議論しながら資料や写真を集めました。完成までにおよそ1年かかりました。

### ●教師が使えることが大切

戦略は素人にはわかりにくい。教師がどうかかわれるのかと考え、戦略を進めていくための冊子を作ればと思いました。

現場の教師の持っている知識は多くはありません。教師が使えるもの、この冊子をもとに授業案が作れるようなものを目指しました。学校の教育現場で使えるものを作るとい



冊子の企画編集を担当した作成委員会の（左から）坂根隆治さん（伊丹市 市民自治部環境政策室 みどり自然課専門官）、國村和伯さん（伊丹市立有岡小学校 教諭）、奥山清市さん（伊丹市昆虫館 館長）。

とが、一番活用できると言えるのでそれを目指しました。

### ●伊丹の身近な生き物を扱う副読本を

委員会内で内容について議論する中で「子どもたちに地域のことを伝えていく内容が欲しい」、「伊丹市の自然環境の意識づけを行うことが必要」、「理科の授業の多くが教室内だけになってしまうので、校庭でフィールドワークできるようなもの、身近な生物多様性を扱うものがよい」等の意見ができました。そういった議論の中から、伊丹の身近な生きものを扱う生物多様性副読本という発想が生まれました。伊丹の自然環境に焦点を当て、実践的なハンドブックで、環境学習の進め方がわかり、小学校の授業で使える、そして中学校での活動につなげるような副読本を目指しました。

### ●みんなで生物多様性保全に取り組んでいくきっかけづくりとなるように

伊丹の中に豊かな生物多様性があると思う人がいる一方、街しなくて自然はほとんどない、生物多様性は低いものと思っている人もたくさんいます。そういう人たちに、今からみんなで生物多様性保全に取り組んでいけば、生物多様性の魅力も増して、よい自然環境が身近に感じられるようになる、といったことを紹介していきたいと考えました。川はあるが山はない。そのような中で多様性の話をするとすれば、より分かりやすく、より身近に紹介していく必要があると思いました。

生物多様性の魅力を子どもたちに伝えていくために、このような冊子を作ったと理解しています。

### ●伊丹のどこにどんな生きものがいるか伝えたい！ 授業で使えるように

伊丹という場所で、実際に何があって、何がいないのかと



■冊子データ

『身近な生き物とわたしたちの暮らし』伊丹市立小学校生物多様性副読本

2015年3月発行

制作・編集：伊丹市生物多様性副読本作成委員会

協力：伊丹市教育委員会事務局 学校指導課

発行：伊丹市市民自治部環境政策室みどり自然課

体裁：A4判変型36ページ

その他 ・小学3年生以上を対象に全教室に児童数分を配置した。

・3年ごとに更新し、改訂することで作業を始めた。

■インタビューデータ

日時：2016年11月9日

参加者：◎制作者

伊丹市生物多様性副読本作成委員会

坂根隆治（伊丹市 市民自治部環境政策室 みどり自然課専門官）

奥山清市（伊丹市昆虫館 館長）

國村和伯（伊丹市立有岡小学校 教諭）

◎インタビュー

地球環境関西フォーラム 生物多様性部会 ワーキンググループ

座長：山西良平 委員：佐久間大輔、宮川五十雄

◎事務局

地球環境関西フォーラム 事務局 仲上、高橋

株式会社地域環境計画 上崎、石山

p.2~3  
1「生き物がいっぱい！ 伊丹の自然」

伊丹市の自然が  
わかりやすく示されている

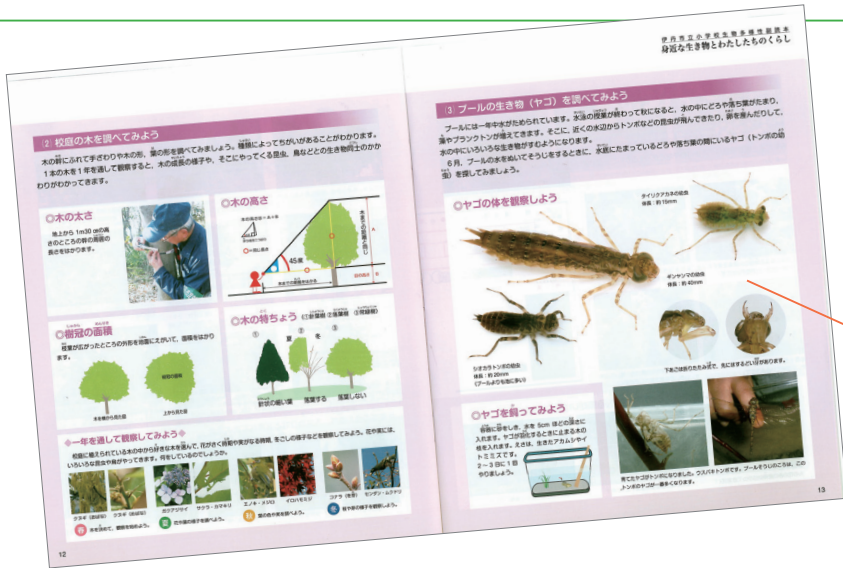


p.24~25  
6「いろいろな生き物を調べよう」

種の特徴がわかりやすい  
校外学習で使える



プールにいるヤゴについて紹介  
身近な生きものへの興味を引き出す



いう点に注目しました。一例としては、伊丹市内の学校にどのような樹木が植わっているのか、そういった内容を冊子に盛り込めればよいと思いました。「こんな生きものがこんなところにいるよ」と気づくようなものにしたかったです。

伊丹市内全体を見て調べて、自分たちの学校の周りで見ても調べられる、そういう対象となるもの、例えば学校のプールのヤゴなど、必ず使えるようなものを入れておく、盛り込んでおくことを意識しました。授業の中で、その分野であれば必ず使えるものになるよう、身近な生きもの、目を向けたら必ず使うものを盛り込むようにしました。3年生の環境体験学習に対応できる冊子にしていけることが必要と考えました。そうすることで長く使える冊子となると考えました。

さらに、食物連鎖など本格的な話も盛り込んでいくようにしました。大人が理解して、子どもに伝えるという流れとしようと思いました。

●写真をたくさん入れました

初めは写真とイラスト、図を配置した割付を考えていましたが、予算の都合上、写真中心の構成にしました。冊子に載せる写真は、市や総合教育センター、昆虫館などでストック

している写真の他、市民の方にも提供をお願いしました。

載せた写真はちょうど400枚で、撮影協力者は45人です。すべてアマチュアで、この取り組みに応援いただいている、伊丹市に関わりのある方々です。ほとんどの写真は伊丹市内で撮影されたもので、写真一枚一枚に撮影した人の生きものに対する深い思いが感じられます。

全くないものについては新たに撮影しました。昆虫館ならではの写真も随所に使用しています。

Step3  
作ってみての思い、  
課題、次に向けて

●それぞれの学校で使って欲しい

「校庭の生き物マップ」<sup>〔図版左下〕</sup>はそれぞれの学校で先生が自分たちで作ってみるとよいと思います。それを子どもたちに説明し、学校の中での生物多様性という位置づけでマップとして使えると考えています。先生方が勤務されている学校の「校庭の生き物マップ」をそれぞれ作って、パウチして活用するとよいと思います。

この冊子は、今は小学校へ置いておくようにしています。持ち帰らせるなら、小学3年生から6年生までの4年間持ち続けることを伝えないといけないですね。

●若手の教師が使えるように

理科以外の教科書に生物についてどれだけ載っているのかを把握し、理科嫌いの先生にどう伝えていくかが大切になります。この冊子をうまく活用するための資料などを用意するのがいいかもしれません。若手の教師（好きだけどうしていいかわからない人）が使えるようにしていくことが大切です。

●議論のきっかけになれば

学芸員たちは生物多様性のとらえ方が色々あるので、この冊子を材料として、議論のきっかけとなったことが興味深いのです。一般の人たちには身近な自然を紹介する一方で、専



「校庭の生き物マップ」は  
それぞれの学校での展開が可能



専門家の人たちにとってはこの冊子が議論の呼び水となるようなものとなっている点が、この冊子が評価された理由の一つではないでしょうかと思います。

### ●冊子のアピールをもっとすべき

冊子は学校に配布しましたが、半数はまだ活用されていない状況だと思います。冊子のことを学校に十分にアピールできていないです。作ったからには周知する流れが必要だと思います。使い方を考えあぐねている先生も多いと思います。これを使ったら授業も楽になるといった流れが必要だと思います。そのようなツールがあればいいと思います。

各小学校での生きもののデータの蓄積はされますが、異動などで先生が変わった場合、次の先生に引き継ぐのが難しいです。理科が好きな先生ばかりではないので、そういった先生に理科の魅力を伝えるのが大切ですね。

テーマとしては網羅できていますが、実際の授業で使おうと思った場合、写真の大きさなどもまだ改善の余地があると思います。

### ●中学生向けの冊子を作りたい

次のステップは中学生だと思います。この冊子で生物多様性に興味を持った小学生が中学生になったとき、身近で気軽に使えるようなガイド的な冊子が必要だと思っています。家族も巻き込めるといいですね。

### ●多くの人とつながるアクションを！

例えば、伊丹市生物多様性交流の日を定めて、その日は生物多様性の保全に関する取り組みをしている市民団体や学校園、企業など、いろいろな人が集まって交流できる機会を昆虫館につくるとか、展示キットを作成し、巡回展示ができるようにするか。小学校のプール掃除の時にヤゴ等を学ぶ資料の貸し出し等も考えられると思います。生物多様性の保全に向けた昆虫館事業の新たな展開が期待されています。

## Step4 活用に向けて ——どう使えるか

Q とても使いやすい冊子ですが、授業で使うことを想定していましたか？ コンテンツが12個ありますが、どれくらいのコンテンツを授業で使う想定で作ったのでしょうか？ 何コマくらいの授業で使えるのでしょうか？

理科の教科書の内容にあわせながら、この冊子をどう使うかを考えました。3～4年生で「身近な生き物探し」、「昆陽池公園の生き物観察」、5～6年生で「伊丹の自然環境」、「在来生物と外来生物」、「食物連鎖」等の授業を想定しました。

Q 生活科ではなく、かなり理科を意識して作成されていると思いますが、国語の単元の方が扱いやすい場合もあるのではないのでしょうか。違う教科での展開を意識しているのでしょうか？

作成段階から社会科でも使えるという話はでていました。今、生活科で使っている学校もあります。国語でも使えると思いますが、いずれにしても補助的に色々な写真や資料があるともっと使える幅が広がると思っています。

Q 生物多様性というざっくりとしたもの、項目12（自然とともに生きる社会を考えよう）などは単元の授業で扱うのは難しいのではないのでしょうか？

6年の最後に「自然とともに生きる」という単元があり、その発展学習と考えています。

2017年は改訂版作成の年です。この3年間に副読本を使った授業や昆虫館の学校と連携した取り組みも進んでいます。その実績をもとに改訂版を作る予定です。その中で、スペースの都合で冊子には載せられなかった写真や資料を含めて電子データで一括管理し、学校現場でいつでも自由に使えるように教材として提供する仕組みを作ろうと考えています。



p.36~37  
12「自然とともに生きる社会を考えよう」

子どもたちに向けての方向づけ  
ができています

## 政策広報ツールとして 座長 山西良平

生物多様性に係る諸施策の根幹をなす「生物多様性国家戦略2012-2020」の概要は、『めぐみの星に生きる』（環境省）〔図版左下〕というパンフレットによって紹介されています。戦略本体は250ページを超える膨大なものですが、ここではその内容がA4版24ページに集約されており、資料性も高く、この1冊で戦略の全体像が把握できるよう工夫されています。表紙には日本画を配し、本文においてもイラスト、写真などが効果的に使われていて読者を飽きさせません。環境省はこれ以外にも「まもろう 日本の生きものたち 私たちにできること」、「生物多様性 COPI0以降の成果と愛知目標」など個別テーマの理解増進をはかるための冊子を多数刊行し、国としての責務に対応しています。

生物多様性基本法の施行（2008年）以来、各地の自治体は努力義務と規定されている生物多様性地域戦略の策定に取り組み、都道府県や政令指定都市ですでに7割以上が策定済みであり、市町村でも取り組みが進んでいます（環境省報道発表資料/2015年5月）。また環境省は「生物多様性地域戦略策定の手引き」を地方自治体向けに刊行し、その手助けをして

います。地域戦略を作った自治体では、その内容をいかに住民に伝え、広め、行動につなげていくかが肝要です。ここでは、行政から寄せられた地域戦略の広報ツールについて概観していきたいと思います。

各地域戦略の本文は、どれも当該自治体のウェブサイトにおいて全文公開されていますが、長文であり、有識者の委員会や環境審議会での議論を経て作成されることもあってカスタイルや表現も固いことが多くあります。このために自治体では別に概要版を作成し、広報・普及用のツールとしているのが通常です。ところが概要版を作成することなく、戦略文書そのものを、地域のすべての構成員が理解し実践に踏み出すためのツールとすることを想定して策定し、冊子の編集・発行に直結させているのが豊岡市の『いのち響きあう 豊岡をめざして』〔図版右下〕です。小学校区を地域の単位と定めるなど内容もユニークであり、策定には高校生の部会を設けるなど次世代の声も反映させています。その結果、冊子としての出来栄は傑出しています。

それぞれの地域戦略は地域の条件やこれまでの取り組みを



『めぐみの星に生きる  
生物多様性国家戦略2012-2020』  
(環境省/2013年)

デザインにも力を注ぎ、表紙には日本画を配している  
(図版は表紙)

『いのち響きあう 豊岡をめざして  
豊岡市生物多様性地域戦略』  
(豊岡市/2013年)



地域戦略を紹介する冊子としては傑出している  
(図版はp.12)

『豊岡市環境基本計画』  
(豊岡市/2007年)

行政文書でありながら、読みやすいように隔々まで工夫されている。市民と協力しながら環境行政を進めている姿勢がよく表れている（図版は表紙）





『未来につなぐ生物多様性にしのみや戦略 概要版  
～生きものと てあい ふれあい まなびあい～』  
(西宮市／2012年)



『京都市生物多様性プラン 概要版  
生きもの・文化豊かな京都を未来へ』  
(京都市／2014年)

西宮市の戦略の役割を広域性、独自性、国際性の3つの観点から説き起こしている  
(図版はp.3)



反映して個性豊かなものとなっています。たとえば『京都市生物多様性プラン 概要版』【図版左上】では伝統・文化・暮らしとの関わりが強調されています。また山間部から海域までの自然に恵まれた西宮市は、戦略策定による自らの社会的役割を、「西宮市独自の生態系を守る役割」にとどまらず、「広域的な役割」、「国際的な役割」にまで広がっています（『未来につなぐ生物多様性にしのみや戦略 概要版』【図版右上】）。

概要版などのパンフレットは、それを手にした市民の読む気を誘うものでなければなりません。この点において『生物多様性いたみ戦略 概要版』【p.14参照】は戦略の内容をかみくだいて割り付け、写真を多用してビジュアルに仕立てています。さらに市民自らの思考や行動を促すためのコラムが並び、最後に「ここは、あなたの取り組みをいれてください」との空欄が設けられています。

兵庫県を筆頭に神戸市、京都市、奈良県など概要版とは別に個々のテーマを深めた配布物を発行している自治体も少なくありません。神戸市は『生命のにぎわいと私たちの暮らし』【図版左下】という8ページ建ての漫画形式のパンフレットを作成

しています。副題は～私たちの「暮らし」を支える「生物多様性」を考える～というもので、市民生活に密着した、とっつきやすい、説得力のある内容になっています。

大阪府は、「大阪21世紀の新環境総合計画」で地域戦略として位置づけ、『知ろう・伝えよう おおさかの生物多様性』【図版右の上】という冊子を発行しています。これは政策広報ツールというよりは教材として利用されることを明確に意識して作成されたもので、大阪府下の自然が具体的に紹介され、生物多様性の意義もわかりやすく説明されています。

直接生物多様性を扱ったものではないですが、大阪湾再生推進会議（事務局：国土交通省近畿地方整備局）が発行している『大阪湾再生行動計画』【図版右の下】は、府県を超えた広い範囲を対象に多岐にわたる課題をひとまとめにした資料性の高いパンフレットです。



『生命のにぎわいと私たちの暮らし  
～私たちの「暮らし」を支える  
「生物多様性」を考える～』  
(神戸市／2013年)



『知ろう・伝えよう おおさかの生物多様性』  
(大阪府／2015年)

大阪の自然に根差した環境学習の  
ツールの意識して作成された冊子  
(図版はp.10)



『大阪湾再生行動計画』  
(大阪湾再生推進会議／2016年)

漫画を使って日常生活での心がけをわかりやすく説明し、小学生にも理解できる内容となっている  
(図版は p.2)

情報量抜群のパンフレット。広げるとA1判、裏面には集水域全体図と周辺拡大地図  
(図版は表紙)

# 教育ツールとして 委員 佐久間大輔

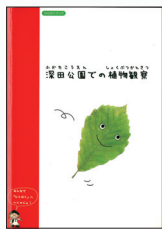
紙のパンフレットが作られる一つの理由に、児童や野外学習の参加者が気軽に持ち運んだり書き込んだりできる学習ツールとしての需要があります。タブレットが普及したとはいえ、野外観察会で気軽に使う、というわけにはいかないでしょう。子どもの学習もすべてをITに置き換えるというわけではなさそうです。

教育ツールとして作るパンフレットは二つの対象を考える必要があります。一つは実際にそれを使って学ぶ人。もう一つはそれを使って教える人です。内容に何を盛り込むのかはその両者の力量を考えてよく練り、絞り込む必要があります。例えば、小学4年生を対象にした教育ツールであれば、その興味と理解力に配慮するのは当然です。同時に、小学4年生を引率する教員が使いたくなるツールであることも必要です。例えばこのテーマで観察しておけば4年生で習うこの単元への理解が深まる、というような仕掛け（配慮）は効果的です。また教員の自然への知識にはばらつきがあります。ちょっと自信がない先生でも安心して使えるツールであることも大事で

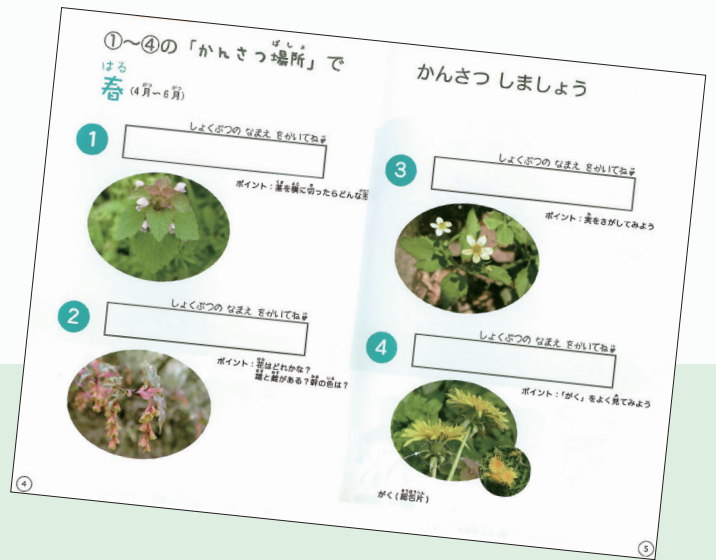
しょう。もちろんそのパンフレットを使ってやってみたい、というワクワク感も重要です。教え手がいない自己学習ツールとして作る場合には相当にハードルが上がります。

こうした観点で、優良パンフレットに選定した2点 [p.9参照] はいずれも評価が高いものでした。この他に「秋吉台の草原学習のしおり」 [p.29参照] も地域を訪れた来場者向けにバランスよく作られています。「深田公園での植物観察」 [図版下] はセルフガイドとしての利用にはハードルが高いかもしれませんが、観察会講師が使う補助資料としては良い助けになるでしょう。「森のめぐみ グリーンウェイブ」 [図版p.21上] も植樹という一過性のイベントを生態系理解につなげてくれます。

こうした資料は、現場に行かないと手に入らない場合が多い点が残念です。学習計画を立てる前、どこに行こうか決める時点で情報があるとさらなる利用につながるでしょう。利用を広げるためにはWebでのPDF公開や使い方の手引などがあると良いかもしれません。



『深田公園での植物観察』  
(兵庫県立人と自然の博物館／2007年)



「人と自然の博物館での観察会」という具体的な利用を想定したもの (図版は p.2~5)



「森のめぐみ グリーンウェイブ」  
 (『生物多様性と子どもの森』キャンペーン実行委員会  
 /2012年)

「植樹」という体験を、生態系の関わりまでイメージをふくらませることができるように配慮された冊子。web上には具体的な使い方の「手引書」までが公開されている(図版は「調整的サービス」のページ)



「もっと知りたい身近な海」(図版右下) や「寿司ガイド」(図版左下)

は持続的な水産資源利用を考えるための学習資料として作られています。具体的な統計をインフォグラフィックスを用いて理解しやすくまとめています。消費者教育は野外体験と同様、生物多様性保全にむけた重要な教育の両輪です。学校では社会科や分野を超えたESD教育などで扱われていくことでしょう。NGOから出されているこれらの資料は水産庁などが出している同種の資料と比較して、よりわかりやすくバランスよく作られています。大人であれば両者を比較することでより多角的に学べるでしょう。リーフレットを見るだけでなくその後のアクションにむけた提案があるのも好印象です。



「もっと知りたい身近な海 日本海の環境問題」  
 (WWF ジャパン / 2008年)

ピクトグラムを多用し、わかりやすく情報提示(図版はp.4~5)

できるだけグリーン(緑色)のものを選びましょう!	
天然	総合評価
青背ダネ (魚類)	高
はらまぐら (クロマグロ)	高
いしどまぐら (サマシロ)	高
きほな (サシマグロ)	高
ばらばら (メジマグロ)	高
かつお (カツオ)	高
いりばまち (ブリ)	高
さば (ササガ)	高
まは (ゴマサリ)	高
さんま	高
いわし (イワシ)	高
たい (マダイ)	高
ひらめ (ヒラメ)	高
大新	高
えんどう (エビコウ)	高
鳥肌 (イカ)	高
海老	高
鱈	高
北アザリ	高
鱈	高
鮫	高
鮭	高
鮭	高
鮭	高
鮭	高
鮭	高
鮭	高
鮭	高



「寿司ガイド」  
 (WWF ジャパン / 2012年)

WWFのサイトの「資料室」からもダウンロード可能。消費者として知ることの大切さや具体的な行動も提案(図版は「できるだけグリーン(緑色)のものを選びましょう」のページ)



# 研究機関からの発信

委員 佐久間大輔



『竹林の異変にお気づきですか？  
～タケ類天狗巣病の発症～』  
(兵庫県立人と自然の博物館／2008年)

単純な内容に絞り込んだ情報発信  
1枚のチラシにはこの程度の情報が  
ふさわしい（図版は表面）

研究機関も社会的貢献を求められるようになり、研究情報を発信するようになりました。研究機関には、たくさんの生物多様性情報があります。その多くは学術的な論文や書籍などで公開されていくものですが、より多くの市民に知ってほしいことを広報ツールとしてパンフレットにしています。研究機関からのパンフレットで気をつけたいのが、「主になるメッセージは何か」の絞り込みです。研究論文ではないので専門用語や難しい図表は論外ですが、数ページの冊子に盛り込む情報も絞り込まないと、読み手に伝わらないということがよくあります。発信するいちばん大事な情報を中心に、必要な情報にうまく絞り込んで行く必要があるでしょう。

兵庫県立人と自然の博物館は積極的に情報発信をおこなっています。なかでも『竹林の異変にお気づきですか？』【図版左上】などは情報をうまく絞り込んでメッセージ発信を行い、受け手が観察や情報提供という次のアクションにうまくつなげています。一方で、森林総合研究所関西支所発行の『里山管理を始めよう』【図版左下】は、実際に里山管理に関わる団体におさえておいてもらいたい具体的内容、最低限知っておいてもらいたい知識をうまくまとめた冊子になっています。山林の専門家集団でしか作れない冊子だと思います。あくあびあ芥川の『カシナガ君の暮らし』【図版右下】も親子で読めるタッチでわかりやすく作られていました。



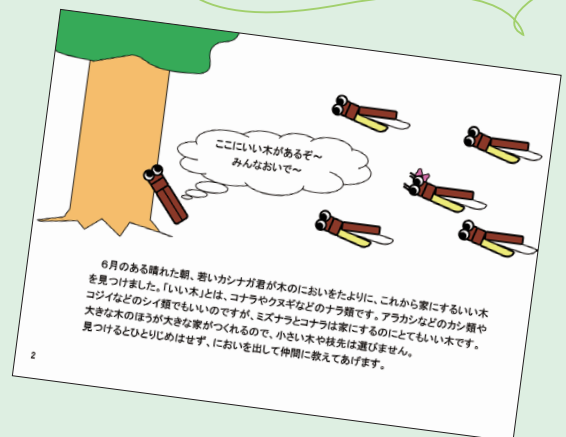
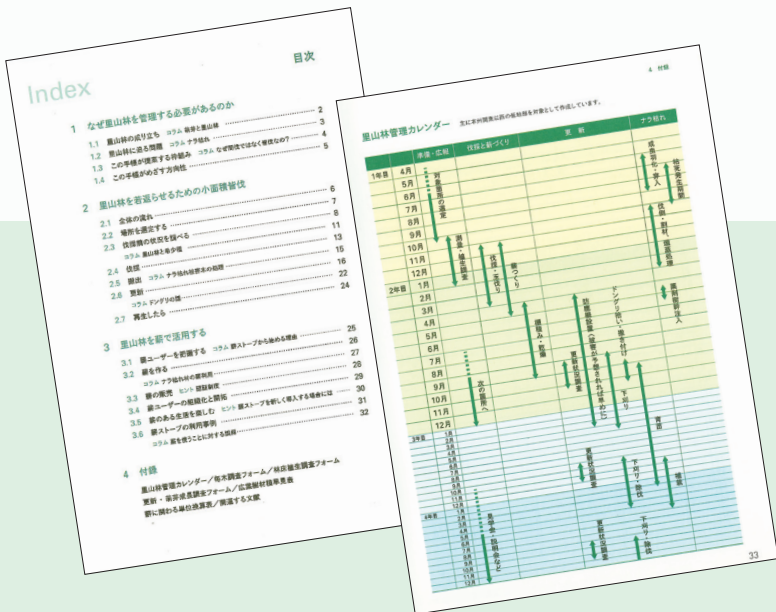
『里山管理を始めよう～持続的な利用のための手帳～』  
(森林総合研究所関西支所／2014年)

「森林総研関西支所 里山管理」で検索すれば  
ダウンロードで入手可能  
(図版は目次とp.33)



『カシナガ君の暮らし』  
(あくあびあ芥川／2013年)

親子で見られるような内容。子どもむけの体裁だが子どもには難しい内容なので親子をターゲットにしていると思われる（図版は p.2）





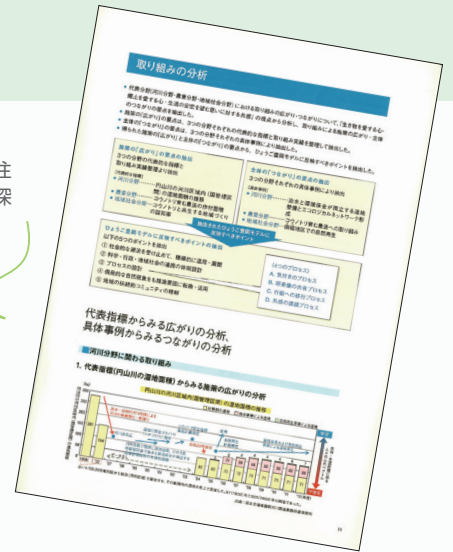
『日本一の里山』 猪名川上流域のクヌギ林  
みんなで守る台場クヌギ  
(兵庫県、兵庫県立人と自然の博物館／2008年)

博物館の調査を基礎にしている  
(図版は表面)

地域で大規模になされた調査を住  
民向けにわかりやすく、しかし深  
みのある内容で伝えている  
(図版はp.11)



『クオノトリ野生復帰に係る  
取り組みの広がり分析と評価 概要版  
クオノトリと共生する地域づくりをすすめる  
『ひょうご豊岡モデル』  
(クオノトリ野生復帰検証事業協同主体／2014年)



一方でニュースレター型の冊子は読み手が最初から興味を持っていただければいいのですが、そうでない時には興味や共感を呼び起こす力はやや弱いように感じました。総合的なものより、テーマを絞った「ワンテーマ型」「場所限定型」など切り口を工夫したもののほうが「自分でもっと調べてみたい」、「見に行きたい」というような次のアクションを呼び起こす力が強いように感じます。

地域限定に絞った例としては『深田公園での植物観察』[p.20参照]、『みんなを守る台場クヌギ』[図版上左]など観察会の補助教材としての使い方が予め想定されている例がありました。出版元は豊岡市となっていますが、外部研究者の皆さんの執筆による『クオノトリ野生復帰に係る取り組みの広がり分析と評価』[図版右右]も、地域に成果を説明する冊子としてピクトグラムなどをうまく用いた好事例でしょう。「クオノトリ野生復帰のあしあと」[図版右中]がもたらす情感としての理解とこの本の科学的な理解、その両方のアプローチで成功していると感じます。

リーフレットとは異なるカテゴリーですが、各地の博物館は充実した読み物として「冊子」をたくさん作っています(例えば『うなQ ウナギの不思議』[図版下])。興味を呼び起こす力は非常に強いですが、多くが有償の冊子となっていること、流通先が限られていることから広がる力が弱いことが残念です。今後の工夫が必要でしょう。



『クオノトリ野生復帰のあしあと』  
(兵庫県豊岡市／2014年)



印象的な写真を用い、地域の取り組みを確認し、クオノトリという鳥一種に限らずその生態系復元、さらには地域づくりのなかでの意義を伝える冊子として構成されている  
(図版はp.16~17)



『うなQ ウナギの不思議』  
(和歌山県立自然博物館／2011年)

類書のない内容なので市販したいところ。  
博物館の発信力はこのあたりに限界がある  
(図版はp.4~5)



# 市民団体からの発信

座長 山西良平 委員 宮川五十雄

自然保護、環境学習、自然体験などを目的とする市民団体の活動は、生物多様性と深くかかわっていることが多くあります。団体が発行するパンフレットや冊子は、通常、地域における自分たちの具体的な活動内容や実績を紹介し、周囲の理解を得て活動の輪を広げることを狙いとしています。そのような中には生物多様性理解の促進に大きな役割を果たしているものもあります。放置林を再生して里山を復活させ、自然体験学習の森を運営している「菊炭友の会」（川西市）が発行しているパンフレット『黒川・桜の森』【図版左】がその好例です。片面で会の沿革と活動概要をとりまとめ、活動への参加を呼びかけるとともに、もう一面ではルートマップを中心に据え、季節ごとの花をリストで紹介しています。炭焼窯の解説イラストも添えられています。読んでいて里山の生物多様性と人との関わりの大切さが伝わってきます。コンパクトに横に折りたたむことができ、現地への携行にも便利です。同様に「自然と文化の森協会」（尼崎市）による4ページの

パンフレット『エノキをめぐる生きものたち』【図版右】も、宅地の中に放置されていた照葉樹林を、エノキ・ムクノキを中心とした都市林によみがえらせる取り組みを紹介する中で、多様な生物を育む森の魅力を、周囲の都市住民に向けて発信しています。

『豊岡市田結地区の挑戦 コウノトリと共生して暮らす村づくり』【図版p.25左】は、過疎高齢化に悩む海沿いの小さな集落が、コウノトリの飛来をきっかけに、どのように地元を再発見し、地域づくりに取り組んだのか、その記録です。村で水田稲作が衰退した背景、コウノトリが飛来したときの村の人たちの思い、コウノトリが好んだ田結の自然の調査、耕作放棄地の状況と地権者たちの合意形成、内外の様々な人たちを巻き込んだ湿地創造活動の様子など、これまでのプロセスが丁寧に取材されています。その結果、この冊子は、農山漁村の衰退に悩む自治会の役員や有志の若手、あるいは地元自治体の担当職員などにとって、多様なノウハウやヒントに満ち



『黒川・桜の森』  
（森林ボランティア 菊炭友の会／  
2014年）

行ってみたくなる、活動に参加してみたくなる、そのような気持ちを起こさせるパンフレット（図版はルートマップの面）

『エノキをめぐる生きものたち  
～猪名川自然林生物多様性戦略へむけて～』  
（著者：自然と文化の森協会  
発行：兵庫県立人と自然の博物館／2010年）

タマムシのとふ森づくりを合言葉に、都市に自然林を再生する夢が膨らみます（図版は p.1）



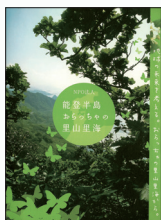


『豊岡市田結地区の挑戦 コウノトリと共生して暮らす村づくり』  
(コウノトリ湿地ネット/2012年)

ごく普通の村人たちが、私たちにも手が届きそうな手法を積み重ねて、コウノトリとの共生を実現した記録。当事者への丁寧な取材と、専門的解説のバランスが魅力(図版は表紙)



『NPO法人 能登半島おらっちゃんの里山里海』  
(NPO法人 能登半島おらっちゃんの里山里海事務局)



活動の概要がよくわかる。コストをかけなくてもすぐれたパンフレットができることを実証(図版は内側の見開き)



た一冊となっています。また、本冊子はまだ大成功の物語ではなく、明るい方向が見え始めた途中の段階、いわば未完の姿を公開している点も注目されます。

『NPO法人 能登半島おらっちゃんの里山里海』(図版上右)は、能登の里山・里海の生物多様性保全活動や、人材育成、都市農村交流事業、地産地消を目指した市場の運営などの幅広い活動を金沢大学と連携しながら展開しています。その幅広い活動の趣旨と概要がわずか4ページのパンフレットにまとめられています。また、人材育成活動の詳細は『能登里山里海再生の手引き3 里山里海を活用した環境教育』という冊子によって知ることができます。

民間団体からは他にも個別テーマに絞り込んだインパクトの強い啓発パンフレットが寄せられています。「ヒナを拾わないで!!」、「野鳥は飼うだけでも罰せられます!」(図版左下)などです。

『エノキをめぐる生きものたち』(p.24参照)の編集・発行には兵庫県立人と自然の博物館(ひとはく)が関わっています。「ひとはく」はここに限らず、県下各地域において市民団体や行政あるいは企業の生物多様性に関わる活動を専門的な立場からきめ細かくサポートし、また自治体による生物多様性地域戦略の策定においても大きな役割を果たしていることが、今回のツール収集事業からうかがえました。自然史系博物館がこのような地域の開かれたシンクタンクとして積極的な役割を引き受け、地域戦略の推進力となっていることは高く評価されます。さらに「ひとはく」は県下の生物多様性関連団体に呼びかけ、それぞれの活動を見開き2ページで自己紹介するユニークな冊子『ひょうごのいきもの・ふるさとを見守るなかま』(図版下右)を編集・発行しています。これには141もの団体が掲載されていて、相互の情報交流促進ツールとして有用です。

『ヒナを拾わないで!!』  
(公益財団法人 日本鳥類保護連盟、  
公益財団法人 日本野鳥の会、  
NPO法人 野生動物救護獣医師協会  
/2016年)



『ひょうごのいきもの・ふるさとを見守るなかま』  
(兵庫県立人と自然の博物館、  
ひょうごサイエンス・クロスオーバー・ネット/  
2010年)

県下の生物多様性に関わる141団体の概要がわかる冊子(図版は表紙)



『野鳥は飼うだけでも罰せられます!』  
(全国野鳥密猟対策連絡会)

# 企業広報ツールとして 委員 宮川五十雄

企業が対話する相手は、一般消費者であることもあれば、ビジネス上の取引先や株主などのこともあり、国内外の従業員、事業地の周辺住民なども重要なステークホルダーです。そこで企業は、それぞれの読み手に向けて表現を変えて情報を発信することになります。例えば、生物多様性に配慮した木材調達方針などは、関西の企業からも優れたものが公表されていますが、これらはサプライチェーンに係る玄人向けの表現となっています。

今回は、こうしたビジネスに特化した専門用語の多い冊子は講評の対象から外し、どちらかといえば、一般消費者など広く市民が読める内容として作成された冊子を対象としました。



『大阪ガスグループ 生物多様性の取り組み』 (大阪ガス株式会社／2013年)

多種多様な冊子がある中で、異論なく委員全員の目にとまったのが、大阪ガス株式会社が発行した2冊の冊子です。『大阪ガスグループ 生物多様性の取り組み』(図版左)は、近畿各地の事業拠点での取り組みを紹介する中で、「地域性種苗とは」「チガヤ草原にする意味」「希少種のレフュージア(避難場所)へ」「都心の緑地にできること」「古典文学にみられる在来種」など、個々の取り組みの背景にある、科学や文化に根差した物語がしっかり語られています。一方、『生きもの育む10の取り組み』(図版右)は、身近な木の枝やどんぐりを使った「クラフトづくり」から、「小さな森づくり～ドングリの里親～」や「コンテナビオトープ～トンボを呼ぼう～」といった小さな環境づくり、「お米を食べよう」「ジビエを楽しむ」など食生活を通じた自然共生への気づきなど、楽しみながらすぐ行動できる具体的な方法を10項目に渡って提示しており、読み手はアクションを起こしやすいものとなっています。

いずれの冊子も、それらが配布される場面で、自社社員と読み手がどのようなコミュニケーションをとり、どのように使われるか、ということ想定して様々に工夫されています。社会見学で事業所を訪れた児童や従業員親子、ビジネス上のゲストなどに対して、わかりやすい写真やイラストとともに、それぞれに響くメッセージが書き込まれている点が素晴らしいです。



『生きもの育む10の取り組み 一人ひとりに出来ること』 (大阪ガス株式会社)



屋上緑化や外構植栽を、文化や自然のコミュニケーションツールとして生かした実践例を紹介している(図版はp.9~10)

親子で楽しめるエッセンスが効いている。栽培には卓上に飾りたくなるようなおしゃれな器を奨めたり、ドングリおやつやの簡単レシピがあったりする(図版はp.5~6)

竹中工務店が1964年から発行する季刊広報誌『**approach**』(図版右・下)は、同社が設計施工した建築事例を紹介する広報誌でありつつ、「建築は、人々の暮らしや歴史、文化、芸術などと切り離しては成り立たない」とのコンセプトを掲げて、幅広いジャンルの特集を組み、その中で自然共生や生物多様性に関わる話題も取り上げています。ここで意識されている読み手は、商業ビルや公共建築物の施主、サプライヤー、建築デザイナー、自社従業員など、ビジネス上の関係者ですが、同誌の特集は十分なボリュームで読み応えがある一方で、美しい写真を多用し、初めてその分野に接する人たちにも読みやすいように工夫されています。読者は、同社の最新の設計施工案件をじっくり眺めるのと同じ目線で、建築をとりまく様々な文化や社会背景にも視野をひろげ、自然環境の話題にもじっくり目を通すことができます。同誌ほどのボリュームは珍しいかも知れませんが、自然共生など自社の底流をなすコンセプトを、社内外のビジネス関係者で共有する媒体として、こうした企業広報誌には今後も大きな可能性を感じます。



季刊誌『**approach**』  
(株式会社竹中工務店)

この号では、湧水などを使う伝統的な暮らしの風景と、最新の都市設計における地下水系や水辺を取り戻す仕掛けなどが比較紹介されている  
(図版は Autumn 2014号 p.2~3)



# ビジターパンフレットとして 委員 佐久間大輔

施設を訪れた時に手渡されるパンフレットは、訪れた人への施設からのメッセージです。施設の概要がわかるだけでなく、そこにメッセージが含ませてあると、その場だけでなく持ち帰ったあとの学習の定着に役立ちます。訪れたあと持って帰った後には周囲の人達へのメッセージにもなります。Webサイトのアドレスが書いてあったり、再訪するきっかけとなるような次の催事などの情報も大切です。施設に置くビジター用のパンフレットと施設と離れた場所に配布するPR用のパンフレットは本来かなり異なる役割を担いますが、兼ねている場合が多く、今回の調査で集まってきたものはそうしたものがほとんどです。施設で配布されているパンフレットの好事例を本当に評価するためには実地調査が必要でしょう。

「あくあびあ芥川」【図版下左】のパンフレットはどちらかという他館に置く広報物として作られていると思いますが、ビジターパンフレットとしても施設の目的や魅力がよく表現さ

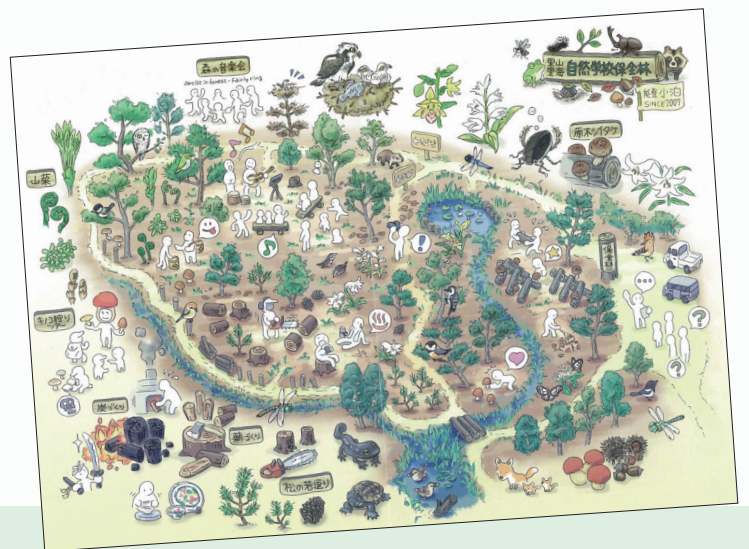
れていると感じました。また「里山里海自然学校保全林」【図版下右】のパンフレットはアクティビティの魅力と地図を兼ねたシンプルなビジター向けのパンフレットです。NPO法人の活動は別のパンフレット【p.25参照】で紹介しているので使い分けをしているのでしょう。「秋吉台の草原 学習のしおり」【図版p.29上】は秋吉台科学博物館、秋吉台エコ・ミュージアムでの学習ツールであるとともに地域全体のビジターパンフの性格も持っています。

こうしたパンフレットには寄付を促すメッセージがおざなりに書かれている場合も多いですが、寄付はその活動・施設の価値に共感した人のかなりハードルの高い行動です。そうした共感を呼び起こすシチュエーションでない場合には難しく、もっとハードルの低い行動を促したほうが適切ではないかと思います。



「あくあびあ芥川  
高槻の自然がわかるみんなの博物館」  
(あくあびあ芥川)

展示だけでなく博物館の  
ミッションが読み取れる



「里山里海自然学校保全林」  
(NPO 法人 能登半島おらっちゃんの里山里海事務局)

かわいいイラスト入りマップは来場者への説明時に文字よりも具体的にアクティビティをイメージさせる力がある。探索の意欲も増すだろう



『秋吉台の草原 学習のしおり』  
(秋吉台草原ふれあいプロジェクト／2012年)

草原の現状や人の生活とのかわりまでを含め子どもにもわかりやすく、具体的に学校での現地見学を想定した作られ方で書かれている。関わりの提案までを含む点が好印象 (図版は p.4~5)



## 観光促進ツールとして 委員 宮川五十雄

観光案内のパンフレット類は、訪れる人が初めてその土地の風物を知る道しるべとして、視覚的に美しくよく工夫されています。しかしながら、今回改めて、観光案内のマップやパンフレットなどには、必ずしもその地域の自然の魅力が十分に表現されていないと感じました。これは、それぞれのパンフレットの制作段階において、観光を熟知する人と、地元を熟知する人とがうまく協働できていないことを示しているのではないのでしょうか。

従来、点在する観光スポットをスピーディに巡るバスツアーなどがもてはやされていたので、観光案内のパンフレット類も、そうしたニーズに対応していたのかもしれませんが。しかし、近年は、降り立った観光地で、散策など、ゆっくりそ

の地域の魅力に触れたい、というニーズが高まっています。観光地を散策する魅力は、メインとなる美術芸術やエンターテインメント施設の訪問にとどまらず、その土地が持つ雰囲気や体感すること、すなわち歴史や気候に彩られたその土地の暮らしや、それを取り巻く自然を含めて味わうことでしょう。

そうした意味で、これからの観光パンフレットでは、工芸や食などを含む文化的魅力と、その土地の人たちが古来親しんできた自然の魅力とを、バランスよく紹介するような構成が望ましいのではないのでしょうか。その際には、訪れた人たちが、豊かな自然環境や里山文化の保全を応援したくなるような工夫があって良いと感じます。

# IV

## これからパンフレットを作る皆様へ

作業開始の前に、□にチェック（✓）してみましょう

### 準備段階

- メッセージを持っているのは誰でしょう。必要な材料を持っている人は誰でしょう。良いパンフレットを作れるかどうかは、企画が立ち上がる前に蓄積された活動や人脈によるともいえます。まずは自分たちの持っている「資産」を棚卸して、なにができるかを考えましょう。

### 企画段階

- 伝えたいメッセージは明確ですか？  
●施策を伝えるのか、意識啓発なのかによって、作り方はかなり変わります。
- メッセージを伝える対象は明確ですか？  
●住民向けなのか、子ども向けなのか、対象を明確に。
- 配布場所はどこですか？  
●学校で配るのか、役所などで配るのか、博物館などに置くのかで目立たせ方や手に取る人の興味のモードも違います。出会い方を想像しておきましょう。
- どう使いますか？ 使い方は明確ですか？  
●指導者が使うのか、自分で読んで理解するのかでもかなり違います。パンフレットの使われ方を想像しておきましょう。
- 基礎となる情報、写真などのデータはどこにありますか？ 著作権はどなたにありますか？
- 誰が作りますか？  
●執筆作業を「みんなで」やると、しばしばコンセプトはぼやけます。コンセプトを固めたら、誰かの判断を信頼して任せるというのも一つのやり方です。

### 作成段階

- 情報量は適正ですか？  
●詳細な内容がベストではありません。メッセージが伝わる、適切なボリュームに情報を絞り込みましょう。
- イラスト、写真など受け手にわかりやすい工夫はできていますか？
- 印刷物の大きさ、折り方、カラーか白黒印刷かなど、作成の目的にあっていますか？  
●例えば子どもが野外で使うパンフレットだったら持ちやすさを重視した小さな冊子になるでしょう。学校現場で使ってもらう資料はカラーの写真が多いよりも増刷しやすいモノクロの線画のほうが却って利点となります。
- どのくらい作りますか？（印刷部数は？）
- いつまでに作りますか？
- イラスト、写真など著作者の許諾はとれていますか？
- 二次利用について記述していますか？  
●普及用のパンフレットだからといって、著作権をないがしろにはできません。著作権者の了承はしっかりとっておきましょう。二次利用を認める範囲などもあらかじめ明示しておくトラブルをさけることができます。

### アクションにつながる仕掛け

- 発行した団体の連絡先は明確ですか？ コンタクトが取れるようになっていますか？  
●発行した団体へのコンタクトがとれるような住所や電話、ホームページの URL やメールアドレス、SNS アドレスなどを示しておくことは、利用者との接点を作ることができ、双方向の情報交換が可能になります。
- パンフレットを使ったイベントなど、フォローアップはできますか？  
●キャンペーンや学習会などがあるといいでしょう。印刷物だけでなく Web や実際の活動などと組み合わせることで、効果はより高まるでしょう。
- アクションにつながる提案や仕掛けはありますか？  
●たくさん情報を受け取った人が、次にどうしてほしいのか、何か提案があることで「ふーん」で終わらせない、具体的なアクションにつなげることができます。教育パンフレットやビジターパンフレットなどでは、思い出を他の人にシェアする事もできます。

### 次につなげるために（アーカイブ）

- 作ったパンフレットを一過性のものとせず、保存し、継続的な活用ができるようにしておくことは、未来のパンフレットを作る人たちに役立ちます。

## 終わりに

パンフレットは書籍や学术论文などと違い、どこかにきちんと保管されることがありません。配布が終わればなくなり、場合によっては発行機関からも失われてしまいます。しかし、今回のようにある程度まとめれば2015年時点での行政、企業、研究機関や博物館、市民団体などの生物多様性に向かう活動の状況を示す資料となるでしょう。今回の資料は博物館や行政などに集まってきた資料です。すべてではなくとも、どこかに収集保管する仕組みがあることは大事な活動に思えます。今回の資料は試験的に大阪市立自然史博物館に保管することにしました。

パンフレットは一度きりの予算で作って配布するだけのものも多く、試作して利用者の反応を見て改善を図るといようなチェックと改善が働きにくい存在でもあります。そうした時に、良いものも悪いものもたくさん見られる場所があるときと役に立つはずです。

パンフレットをWeb上に公開し、データとして保存することも解決案の一つです。著作権の問題などはありますが、各製作者が気軽に公開できる場などがあるといいのですが。

地球環境関西フォーラム 生物多様性部会  
委員 佐久間大輔

発行 地球環境関西フォーラム  
編集協力 株式会社地域環境計画

2017年9月発行

